

本誌19号(2014.3発行)の巻頭言で、前全カリ副部長の菅沼隆経済学部教授が「全カリの「たまり場(サロン)」という夢」を執筆した。教員にとって、自分と異なる専門分野の人々と関わることは、知的な広がり生まれ、新しい研究のきっかけができることにつながるという内容であった。この中で、全学部の教員が関わる全カリで、「教員のたまり場(サロン)」を創ることができないかという提案があった。この提案に対して、全カリとしてどのようなことができるだろうか。現在全カリに関わっている職員、教員、それぞれの立場から思いを巡らせるコラムである。

## コラム①

### 全カリが教員の「たまり場」となる可能性について

中島 俊克

私が大学教員になったのは今から30年ほど前だが、そのころは今よりのんびりしていて、教員控室や各教員の研究室で先生方がゆったりとお茶を飲み、雑談している姿が見られたものだ。大学院生や卒業間際の学生たちもそれに加わったりして、教員と学生の間の垣根も低かった。そうした雑談の中で、たまに新しい研究の視野が開けたり、学生が卒論・修論の種をひろったりということもあった。

今ではみんな忙しくなり、同僚の研究室を気軽にノックなんてできないし、教員控室でも誰もがパソコンに向かい、目を血走らせて授業の準備をしている。授業はもちろんゼミのあとでも、学生と気軽に喫茶店に行ったり、飲みに行ったりなどしにくくなった。教員は少しでも時間を作って研究業績を上げること、学生は単位を取ること必死なのだ。時間を無駄に使わないというのは、それ自体いいことなのかもしれないが、大学というのは元々そんなコセついた場所だったのであろうか。

学問あるいは知的営みというのは本来、知性が自由に羽ばたいていく雰囲気と不可分であり、一人一人を狭いところに閉じ込め成果を急がせると逆効果になる場合も実は多い。

酒を醸すときは、樽はできるかぎり一定の低温状態を保ち、振動はもちろん光に当てることさえ厳禁して、長時間寝かせるのだ。そうして、ごくたまに攪拌してやるのが大事だという。知的な営みも同様に、ゆったりとした静かな環境と、たまに与えられる外部からの適度な刺激があって初めて、成り立つはずなのだ。

現代の忙しい大学の中に、そうした真の知的な営みの場を作ることは、絶望的に難しいのかもしれないが、立教大学には幸い「全カリ総合」というものがある。ここは「学際的に教育する」のが建前なので、ここで教える教員はたいてい、自分の本来の専門から少し外れた内容を教えることになる。自分で本を読むより、同僚にじかに聞いた方が早いので、同僚の研究室のドアをノックせざるを得なくなる。毎年

繰り返している専門の授業と違い、勉強したばかりのことは教える側にも新鮮なので、授業にも熱が入る。テーマそのものに惹かれた学生が全学から集まってくるので、聞く方も熱心である。そうしてできあがってくる教員間の、また教員と学生の間の熱いつながりが、専門の研究・教育の中で窒息しそうになっている知性に、息継ぎの場を提供することになる。そういう場所が与えられているのだから、教員も学生も、それを生かさない手はないだろう。全カリ総合が、そのような自由を求める教員・学生の「たまり場」になってこそ、大学は大学といえるのではないだろうか。

なかじま としかつ

(本学経済学部教授／

全学共通カリキュラム運営センター  
総合教育科目構想・運営チームリーダー)